

リオ・オリンピックが開催された。次は東京、ということ、このオリンピックにかける日本国民の意気込みはあきらかに高まっていた。同時に、東京では2度目となるオリンピックを世界にどうアピールするのか模索される中、前回大会を見つめなおそうと昭和39年(1964年)の大会およびその時代がクロージングアップされているようだ。テレビなどでその古い映像を目にすることも多くなった。私は昭和36年生まれだが、古い映像を見ていると、この新旧2つの大会の間の50年余りに自分自身が生きてきた時代がすっぽり収まるのか…といった回顧モードにとらわれてしまう。そういったわけで、このエッセイでは「昭和のあるある」と、この50年で変化した人々のありよう、そして「東京」の意味の変遷について書いてみたい。

ちなみに前の東京大会の時3歳であった私は、オリンピックそのものを覚えていない。しかし、大会後に父に連れられてオリンピックの記録映画を見に行った。当時は、そこそこに映画館があって、記録映画が今のテレビの代わりだったのだ。私はその映画館で席を離れてチョコチョコしていた。暗闇で転んで大泣きし、映画を中座して父に連れ帰られたことだけを覚え

ている。
昭和40年代、小学生の頃。思い出のスライドショーならば、出てくるのは「シェー」をしている子供たちの写真だ。当時の流行語は「ポイン」とか「あっと驚くタメゴロー」など、今の感覚ではもはや理解不能である。

この時代はテレビ全盛。テレビは東京発信。東京タワー

なんて、今日、絶えて久しいヨーロッパな(歌がフランス語)スターがいた。今は何をしているのだろう。

少し時代がくだって昭和の終わり頃は、現在、少しブームになっている1980年代。私は大学生だった。当時の大学生は「車さえあればモテる」、あるいは車があっても「モテないのは車がボロいか

「車がさあ」とかいう、にわか東京弁にかなりの抵抗感を覚えながらもなぜか、つっこむこともできない空気があった。「車ほしいけど駐車場代が高すぎて車庫証明がとれない」というので、「実家で証明をとって東京に乗っていったら？」(違法路上駐車を推奨しており、どうかとは思いますが)といったところ、「そした

ら、本当に昭和が終わった感じを受ける。その後、インターネットやメール、携帯電話など、昔のテレビや歌謡曲の世界とは異質なツールがどんどん普及していった。かつてエセ東京弁だった同級生たちにも変化がみられた。みな誇らしげに、というか、やや必要以上にカーブファンを表明し、周りの目も気にせずわざとのように広島弁で話すようになっていた。

今年、広島カーブは25年ぶりの優勝に向けて快進撃中であるが、横浜スタジアムや神宮球場でも半分が赤い集団でうまっている。あれは広島県出身者が集結しているのか？ とははじめ思ったが、多分そうではない。もはや「地方」なんてどうでもよくなったのだ。どこの地方でもイイものはイイ。東京の呪縛は完全にとけているのだ。価値観の幅が広がって、いろいろな形が許容されるようになった。これは絶対いいことだ。そういう意味では、この50年、文化的には良い方向に来たのだと思う。今度の東京オリンピックは「東京タワー！」の東京でなく、あのIOC総会でロゲ会長(当時)が気の抜けた声でいった「トキョ〜」くらい、肩の力の抜けたスタンスで、オシャレな大会にしてほしいと思う。

リレーエッセイ

時間の風景

902

オリンピックによせて —2度目の東京オリンピックと 50年余の時の流れ—

小園内科・循環器科(広島県)理事長 小園 亮次



がその象徴だ。みーんな、同じ方向を向いていた。レコード大賞や紅白歌合戦は異常な高視聴率。「キャンディーズの3人ではだれが好きか」の話題でみんなが盛り上がり、ついでにいうとミキちゃんが好きだというのは明らかに少なかった。今にして思うとピンク・レディーはエロさ全開なのに、教育委員会に禁止されることもなく、小中学生の男女に受け入れられていた(今のAKB48とあまり変わらないか…)。渋いところではミッシェル・ポルナレフ

ら」というアホな考えに本當にとりつかれていた。当時の流行の発信源は雑誌『POPEYE』や『宝島』。これも東京発だ。ただ、はやっていたファッションやディスコでそろって踊るなどのセンスを思い出してみても、やはり今昔の感が強い。

車 といえば、当時の東京志向はすさまじかった。高校卒業後の初めての夏休み、東京から帰省した友人たちと車の話で盛り上がっていた。地元の広島で進学した私にとって、彼らが発する

ら広島ナンバーになっちゃうじゃ〜ん」という反応が一斉に返ってきた。当時は地方出身を必死で隠す時代だったのだ。テレビで誰かが述懐していたが、この頃はまだ、関西のお笑いや関西弁ですら、東京での地位が低かったという。つまり、このあたり、昭和の終わり頃までは、まだ少し中央集権的というか、全体主義的というか、多様性があまり許容されていなかったのかなと思う。

医者になって数年経過し、ベルリンの壁が崩壊した頃か

第58回日本老年医学会学術集会

薬剤師から高齢者薬物療法における

不適切な処方でのスクリーニングでポリファーマシー解消を支援

高齢者に対する多剤併用処方(ポリ

なければならない。各症例で慎重な臨床判断が必要」と指摘した。さらに「診療科横断的に処方支援できる薬剤師の役割は重要だ」と述べた。